

# 処理水の放出開始

## 保管の限界 打開へ

東京電力は24日、福島第1原発にたまり続ける処理水<sup>①</sup>の海洋放出を始めた。保管タンクの容量が限界に迫る現状を打開し、廃炉に向かう大きな節目となる。2023年度は3万1200トンを4期間に分けて流す計画。最初の約7800トンは24時間体制で放出し、9月10日にも終わる。放出完了までの期間は、第1原発の廃炉目標の2051年まで30年程度を見込む。



東電は準備段階として処理水約1トンを海水約1200トで希釈。放射性物質トリチウムの濃度は1リットルあたり最大63リットル、放出基準(1500リットル未満)を大幅に下回ったことが確認できたとして、午後1時3分に放出

作業に着手した。

約10分後、大量の海水で薄められた処理水が大型水槽から隣の立て坑にあふれ出し、午後1時半過ぎには海底トンネルを通り、約1キロメートルの放出口から海に流れ出したとみられる。

東電の計画では、1日当たり約460トンの処理水を約34万トンの海水で約740倍に希釈して放出する。希釈後のトリチウム濃度は毎日サンプル測定する。

処理水の保管量は約134万ト。処理水のもとにな



処理水の海洋放出が始まった東京電力福島第1原発=24日午後3時59分



大型水槽(奥)から立て坑(手前)に流れ込む希釈後の処理水(東電提供)

る汚染水が日々発生するたため、23年度の処理水の削減量はタンク約10基分、約1万1200トにとどまる見通しだ。

東電の小早川智明社長は記者会見し「廃炉完了まで風評被害を生じさせず、信頼を裏切らない決意と覚悟を持って対応する」と強調。漁業者ら関係者の理解に関しては「首相らが一定程度の理解を得て進めるといふ事実は承知している」と述

① 処理水 東京電力福島第1原発事故で溶け落ちた核燃料(プールの)を冷却したり、地下水や雨水が放射性物質に触れたりして発生した汚染水を多核種除去設備(ALPS)アルプスで浄化した水。放射性物質トリチウムは除去できない。国際原子力機関(IAEA)は7月、処理水が人や環境に及ぼす影響は、無視できるほどわずかだとする包括報告書を公表した。東電は処理水と大量の海水と混ぜ、トリチウム濃度を世界保健機関(WHO)の飲料水基準の7分の1(1リットルあたり1500リットル未満)まで希釈して放出する。トリチウムは自然界に存在し、水道水にも含まれる。

べただけで、東電の見解は明らかにしなかった。内堀雅雄福島県知事は談話を発表し「東電には全社を挙げて万全な対策を徹底的に講じるよう求める。国は前面に立って最後まで責任を全うしてほしい」と要望。県も風評対策を早急に検討する考えを示した。